

旭市チャレンジ通学合宿

子どもたちが親元を離れ、公民館などで2泊3日の集団生活をする通学合宿。昼間は学校に登校し、下校後の食事作りや入浴、学習、清掃、布団の上げ下げなど、日常生活の基本を自ら行うことで、自主性や協調性、社会性を養うことを目的に、全国で展開されている事業です。地域の人が運営に関わることで、地域で子どもたちを育てる環境が芽生えることも期待されています。

旭市では、青少年相談員や各校のPTAが通学合宿実行委員となって、平成19年度から実施しています。本年度は、海上地域(鶴巻小・滝郷小・嚶鳴小)と干潟地域(中和小・萬歳小・古城小)で実施。「自分のことは自分でやろう。自分たちのことは自分たちでやろう」のスローガンの下、それぞれ20数人の5、6年生が集団生活を送りました。

地域の人たちと触れ合う「もらい湯」体験

通学合宿の宿舎となる海上保健センターや干潟公民館には、布団を敷く広い和室と、食事を作る調理施設はありますが、風呂やシャワー施設はありません。このため、他市町村でも行われている「もらい湯」を実施することにし、宿舎近隣の家庭に風呂の提供を依頼しました。

もらい湯に協力してくれた地域の方は「子どもたちは素直でかわいかった」「子どもは宝物という思いがした」など、子どもの来訪を喜んでいました。

子どもからは「1日目はとても緊張しました。とても優しいおじいちゃんとおばあちゃん、気持ちのいいお風呂に入ることができました」、また保護者からは「家族以外の大人と関わることは、礼儀や感謝の気持ちが持て



宿舎での食事作りや清掃活動

る貴重な経験でした」などの感想がありました。

今年から、子どもたちとの活動を希望する学生ボランティアに参加してもらい、良き兄・姉として活動してくれました。

大原幽学が提唱した換子教育と通学合宿

旭市ゆかりの江戸時代の指導者、大原幽学は換子教育を提唱し、子どもや親の成長と自立を促す目的で、7～15歳ほどの子どもを1、2年の間、数軒の家で育てさせたそうです。子どもにとって、親以外の大人に世話になりながら、自立して生活することの大切さを説く教えは、この通学合宿にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

合宿期間が短いなど課題もありますが、地域の人たちの応援を得ながら、今後も実施していく予定です。

校長リレーエッセイ

16



学校は地域最強のパワースポット
 合言葉は「子どものために!」

飯岡小学校長
 伊豆 守彦

パワースポットという言葉が使われて久しい。生命力に満ち溢れ、訪れた人が力を授かる場所として、多くは寺院や神社など霊験あらたかな場所がその対象となり、パワースポット巡りを旅の大きな目的にする人もいる。

さて、子どもが学校で発する一番多い言葉「先生、見てて!」これは子どもの承認欲求の表れである。教師が見ていると学習も運動も一生懸命に子どもは頑張れる。

さらに運動会や発表会など、保護者の参観となれば、がぜん張り切って、いつも以上の真剣さと頑張りで、驚くほどの力を発揮する。大人の温かなまなざしの中で、成長するのが子ども。

一方、保護者がPTA活動や奉仕作業で、学校への惜しみない協力をくださるのも、我々教師が真剣に子どもと向き合うのも、みんな子どものためだ。親も教師も子どものためなら頑張れる。そしていつか親は子どもによって親になり、教師も子どもによって教師となる。

学校は、子ども・教師・保護者それに地域の人たちの力が合致する、まさに地域最強のパワースポットだ!

子どもにとって、親は最も身近な他者であり、教師は最も身近な他人である。この両者は大人の代表として子どもの前に存在する。良いお手本を示し、温かく見守り、行きたくなる魅力いっぱいの学校、帰りたくなる安らぎの家庭を築くことこそ大人の仕事、大人の責任。子どもの笑顔と純真さに触れるたび、この思いを強くする。